

①

「オウム真理教の本質とこれからの仏教」

津田 真一

1995.10.6 (金)

日本仏教徒懇話会

第611回懇話会

◎ Introduction: オウムのマルシャ・バジレ「マルシャの思想」, その落差

◎ オウム真理教事件にまつての所蔵

○ 近代仏教学(合理主義, 主知主義, ヒューマニズム=無神論)の敗北

① 「無明は単純に不知 *Nichtwissen* の意である」(和辻哲郎)

② 業(カルマ)による輪廻の説は迷信である。つまり本来の立場ではない。

③ 仏教は神観念を有する合理的な(ヒューマニズム 不合理なキリスト教より優れる)宗教である。仏教=無神論の神話。→

→近代の必然性=革命 → 状況の变化 → ニヒリズムの現成

○ ニヒリズムの問題

○ ロマンのニヒリズム。「神は死んだ」。終末に向って態度をとり。

○ 日本はニヒリズム。「逃走」(Flucht)である逃走・漂流。

○ オウムにおける美は・美意識の徹底である。→ 本気で「ヤレ気」か?

○ 麻原-オウム教とイエス-原始キリスト教。同質性と違って。

○ カルト性

○ 終末論の問題, 神観念の問題。

○ 「救世主の決起の気勢が」聖示録の救済期待へと一致する

「窮民の極みにおいてこそ、主はあはれみ、救世主の来ると信じておれ」

(J. H. バーマス: V. フリアス『ハイツェル』とナチズムの序)

◎ カルト批判の必要性(断罪は必要)。

たけ

(2)

11月4日までのありにっおれりたより

麻原

- 35才ぐらゐる目処に、自ら進んで困難の先端に自ら進み出る。イエス、ウエーエ。
- 「現法に」(80才ぐらゐる死ぬまで) 平凡に、静かに、正しく生きる思想。
いや、あんなに静かに

- ◎ オウム批判のポイント (仏教界はなぜ沈黙してる?)
 - 麻原彰晃は本当に「最終解脱者」なのか? → ブッダの観心法門の問題。
 - 麻原彰晃は本当にシラガ神を信じているのか? → フォルニヤの観心。
「修行は有限だ。素人初めると素人修行ではキケン」

- ◎ オウム真理教の土壌 → 現代日本の言論におけるニヒリズム

- 中沢新一 「『導師』のニヒリズム」 (『イマージュ』、1995.8)

- 存在 < 個別性の側面・方便・男性性の象徴
< 「生産者無」の側面・般若・女性性の象徴

- マハムドゥーニを教へ: 「宇宙のエネルギーを直接体験する」

- ホウの問題: 「あんなにエモい、本気なやつは他にない」(浅田彰)

- 「外部」の問題。 オウムに勝つ近代仏教の理想を

- 「本来の自己」とは?

- ◎ 仏教の転回。 < 閉鎖系 > から < 開放系 > へ。思想の転回。

- ◎ < 閉鎖系 > の仏教 ゴマをひねる 自分の中の世界を築く

- 「ブッダの観心法門」
 - ① 憶宿命智: ブッダ自身の過去の輪廻の姿の総体
 - ② 衆生縁起智: 「世界」の内実
 - ③ 漏尽智: 四諦 (苦・集・滅・道)

- フォルニヤの < 存在の真理 > サイン

- 唯一普遍の Sein なる無明が、一個人の「現法下的修行」によって明に変わる (渴愛は滅する)。

- 『中論』の龍樹の空 (< 空性 >)。

- ショーペンハウエルの「最高の意味から哲学の真理」E179
「意志と身体の同一性」